

やわらかい微笑みの表情、空をきつて突きあがる把手、こまやかな縄の模様、鋭く透き通った刃——一宮町釈迦堂遺跡では、縄文時代の土偶（粘土製の人形）・土器・石器などが大量にみつかりました。今からおよそ4500年前に釈迦堂で暮らしていた人々が使った道具です。

釈迦堂遺跡は昭和55・56年中央自動車道建設の際に発掘調査され、旧石器・縄文・古墳・平安時代にかけての道具や住居跡が見つかりました。集落の規模や出土品の多さは、県内でも群を抜く存在です。とくに縄文時代中ごろ（約4500年前）には複数の集落があり、人々が多くの土器や石器・土偶を使いながらくらしていたことがわかっています。

土偶は女性とくに妊婦を表現し、縄文人が子孫繁栄や森の豊かな恵みを祈りながら割ったと考えられています。釈迦堂の土偶は1116個と日本一の出土量で、そのすべてがばらばらに割られていました。こうした例は珍しく、昭和63年に国重要文化財に指定されました。

笛吹市探訪シリーズ 第5回 一宮地区



釈迦堂遺跡から出土した土器類

国重要文化財に
土偶・土器・石器など5,599点が指定

釈迦堂遺跡博物館

このほか、この地域特有の立体的な装飾のある縄文土器も大量に見つかりました。その量20トン。うち1200点がこれまでに復元されました。水が曲線を描いて流れる様子に似た模様、渦巻き、ヘビ模様、踊る人の模様など、土器の表面で重なる模様の束は、縄文人の見たものや感じたことを表現しているのでしょうか。実に多様な模様が美しく並びます。

また狩りで使う弓矢の矢じり（石鏃）や獣の解体などに使う小形ナイフ（石匙）、おの（石斧）など

一万点以上の石の道具、そして土笛や土鈴など音を奏でる道具も見つかりました。これら大量の資料はみな縄文人のくらしぶりを示す貴重なものです。そこで今年6月、既に指定されていた土偶に加え、あらたに土器や石器など448

3点が国重要文化財に追加指定されました。合計5599点、

釈迦堂の縄文人が残したものは、日本を代表する縄文の遺産です。

うれしい日、悲しい日、充実した日、こうした私たちの毎日

もいずれ歴史のひとつとなりま

す。縄文人も土器や石器を手に、私

たちと同じく喜びや悲しみを味わい

ながら過ごしたことでしょ

う。長い時間が流れ、土や石の道具だけが残り

ましたが、その美しい道具を見ていると、使った人々の表情

や、道具を囲む人々のいる風景までも見えてきそ

うです。釈迦堂遺跡博物館では、8月11日

から11月23日の特別展で、重要文化財に追加指定された資料を展示

します。しばし縄文土器を前に、時を違えて同じ場所に暮らした人々の息吹を感じてみてはいかがが

でしょうか。

